

昭和二十八年七月二十三日発行  
第三種郵便物認可  
(毎月一回・十五日発行)

(通第一六六号)

年頭聖徳太子の教を仰ぐ……………花田正夫…(1)

目次  
N.B. 是の心顛倒せず……………近角常観…(4)

仏典と私との親しみ(二)……………福島政雄…(17)

# 慈

# 光

第十五卷 第一号

# 年頭聖徳太子の教を仰ぐ

花田正夫

大戦から十八年目の新春を迎えました。日本はまことに目覚しい復興と発展をしてすっかり面目を一新しました。然し米・ソ勢力の接する地域では世界のいたるところに小競合いが続いて居り、日本も外面はともかく内部にはきびしい抗争が続いて居ります。こうした時のキユーバの危機の報道は全世界の人々を震駭させましたが、幸にソ連の譲歩によつて一応危機も避けられホッとしたうちに新年を迎えました。然し一方また中共と印度の国境の紛争は何時はてるとも知れぬくすぶりを見せて居ります。

想いますに、世界をあげて今日程切迫した時機はなく、また今日ほど平和を願う心の切な時ありません。ただ喉元すぎれば暑さを忘れるのとえ通りに、目前の問題が一寸おさまるとすぐに私共は榮観し、それがあやしくなると大騒ぎをして、一喜一憂の浮き沈みを続けて、不徹底のまゝにはしてしないただよいを続けて居ります。

この時、私自身にとつて何よりも大事なことであり同時に全世界にも訴えたいと願うことは、聖徳太子の精神に導かれるという一事であります。さて太子憲章の第一に

争のやまぬ私共の煩惱の渦中にそそがれて居ります。

フルシチヨフソ連首相は、ハマージョルド前国連事務総長を非難して「彼は西側の代表である」ときめつけ「厳正中立の国はありえても、厳正中立の人はありえない」と断言して、米、ソ、中立国家群の三方面から代表者を出す所謂トロイカ方式を主張しました。政治家としてはこうも考えられることでありましようが、太子の『共にこれ凡夫のみ』の教の中に、厳正中立の人がはつきりと現われて居るではありませんか。

ハマージョルド氏の横死のあと、年末にウ・タント事務総長が全会一致で選任されましたが、その就任の挨拶に「自分は善い」とどこまでも主張する立場をとる限り平和は来ない」と申しました。人と人、国と国、社会と社会の間に「我れよし」のみで行けば、相手も「我れよし」を主張して、最後は力と力の抗争となり、強い者勝ちとなつて、正義と自由の望みは絶えるのであります。ここに『共にこれ凡夫のみ』との現実の反省がなくては光はないので、ウ・タント氏はこれを主張して世界に訴えて居るのであります。伝え聞きますと氏はビルマのラングーン出身の仏教徒とのこと

であります。

『和を以て貴しとなし、さかろうことなきを宗とせよ』とありますことは、誰しもよく知るところであります。これこそ人類の歴史の存する限り、人の子の住むところ、何時でも何処でも、私共の行方を照らし示して下さる金言であります。

然しこの教に照らし出される私共の現状は、抜き難い利己心、我執我慢にあやつられて、「われよし、かれあし」を主張し、互に徒党をつくつて争い、修羅場が家庭の内部から社会、国家、国際間にいたるまで、くりひろげられて居ります。太子はここに、

『このころのいかりを絶ち、おもてのいかりを棄て、人の違ふを怒らざれ。人みな心あり、心おのゝ執れることあり。彼れよしみすれば則ち我れはあしみます。我れよしみすれば則ち彼れはあしみます。我れ必ずしも聖に非ず、彼れ必ずしも愚に非ず、共にこれ凡夫のみ。よしみあしみするの理なんぞよく定むべけんや。相共に賢く愚かなること、鑽の端無きが如し云々』

太子の悲心は切々として、「我れよし彼れあし」の対立抗

英国の歴史家トインビー氏が「世界の平和は独り東洋の大乗仏教に期待するところが多い」と云つて居ることは有名なことでありますが、はからずもウ・タント氏によつて仏教精神が發露され、主張されました、このことは私共の近來にないよろこびであります。

さてこの煩惱具足の凡夫が如何にして救われるかということが一大事でありますが、太子はここに

『篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり。四生の衆婦万国の極宗なり。いずれの世、いずれの人か、この法を貴ばざらん。人はなほだ悪しきものなし、よく教うればしたがう。それ三宝によりたてまつらずば何をもつて、枉れるを直うせん』

誰しも自分が病氣だと気付くと治療せずには居られません自分が煩惱にまつわられた——そねみ、うらみ、ねたむ心のやまない——浅ましい凡夫であると知らされる時、その者の救いの光を求めずには居られません。平和を願いながら、その願いは不滅ではあるが、然し無力な願いと色あせて行く、自分の力では手のつけようのない、所謂、直うして見ようのない「枉れる者」の救いを太子は示されたのであります。

太子はここに声を大にされて『仏に篤く帰依せよ』と、

痛すべきところを明示されているのであります。そしてその道は、生きとし生ける者の唯一のよるべであり、国といふ国のよりて立つことの出来る道であり、時代がいかに変わろうとも、人種や国境を異にしようとも、古今に通じ、中外にもとらぬ大道よと讃えて居られるのであります。

さてその仏に帰依するについて、勝鬘經義疏に、『如来に調伏せられて如来に帰依し』

法の津沢を得て信樂の心を生ず』と太子は教えられます。「太陽を探すのに提灯も電灯もいらぬ。太陽は太陽自身の放つ光りによつて自らをあらわす」と西哲も申しましたが、如来の調伏によつて帰依の心もおこるのであります。親鸞聖人の和讃に

釈迦弥陀は慈悲の父母 種々に善巧方便し  
我等が無上の信心を 發起せしめ給いけり

とありますのも同じところであります。「子を持つて知る親の恩」と申しますように、親になつて初めて親心の一端も知れ始めるのであります。さて私共凡愚の身で、清淨真実なる仏心に帰依するということは全く不可能でありませぬ。然し子は親を忘るるとも、親は子を忘れませぬ、その様に仏心の大悲は煩惱に眼を障えられた我等を、倦むことなくやむ時なく照護して下さるのであります。この常照不断

の大願の不可思議力に調伏せられて、無上の信心が發起せられるのであります。

『いたりて堅きは石なり。いたりてやわらかなるは水なり。水よく石を穿つ。心源もし徹しなば菩薩の覚道何事か成ぜざらんといえる古き言葉あり。如何に不信なりとも聴聞を心にいれ申さばお慈悲にて候あいだ信は得べきなり』

と蓮如上人もこの絶えざる如来善巧の大悲を讃仰して居られます。産れたばかりの嬰兒は、父を知らず母も知りませんが、その一肉塊に等しい身に、絶えず注がれる親の念力にほだされて、母を慕い、父を呼ぶ子と転じて行きます。仏心の徹到する妙もそのようであります。

斯く悲心切々とお勧め下さる太子御自身は『世間虚仮、唯仏是真』と常に仰せられつ四十九年の生涯を終えられました。これは仏の真実の智慧光に照らされ、ば照らされるほど、いよ／＼我身の空しさが知らされ、その空しさの隅々までみちみちる仏恩の深いことを随喜された慚愧と感謝の御述懐でありました。

## 是の心顛倒せず

### 近角常観

#### 一 顛倒の善果梵行を壊す

『是の心顛倒せず』の御文は親鸞聖人『信巻』の御文であるも、もとこれ曇鸞大師の『論註』のお意がもととなりてある。全体親鸞聖人の浄土真宗は、自から名乗りて親鸞と仰せられし程にて、聖人の信の立場は、曇鸞大師の『論註』が基礎となりてある。その初めに

顛倒の善果能く梵行を壊す。

なる御文がありて、これは顛倒の善果は、即ちこの世における我等の果報である。身体の健康を始め、富、幸福等、この世の仕合せなることが、梵行——清淨の行をさまたげるのである。即ち我等が、此の世で幸福なることが、真実の正しき道を聞かせぬようにすることである。こはかつて或る幸福なりし人が、この一語を聞いて俄に驚きを立て、信仰を聞かれるようになったと申す程であるが、我等は何程叩かれても驚かぬ。頭に瘡が出来る程叩かれても驚かぬというは、耻ずかしきことである。

さてこれをここに持ち出したは、この世間のことが顛倒であることを言い度いからである。この世間が顛倒であるとは

こは仏教でなくては言わぬ。基督教は

神がこの世の幸福を与え、この世間を与えたと説くのだが、現世を言う所の教である。処が仏教にありては、如何なることがあつても、

この世は皆顛倒と、こは他の教では無いことである。最も一時

精神主義なるものがあつて、ここをそういふ風に言うたことがあつた。ここはうつかりすると『現在斯くして居られるのが恵み』と、これになるから注意しなくてはならぬ。

かつて地方から訪ねて見えた或人が、私の言うのをどういふ風に聞いたものか『現在生活に見て頂く、現在救済が有難い』と言うた人があつた。私『それは何か現在に物でも攫むように思っているのか』と大変いましめたことがあつた。もしそうなると、それは非常な間違いで、この世は何処までもあてにならぬのである。

## 二 凡夫の四顛倒

故に仏教には

常樂我淨の四顛倒なることがあつて、この世は常住である  
樂しみである、我がある、淨かであると思つて居るのが、  
凡夫の四顛倒であるということを言うのである。ここは余  
程

青年諸君には利く処なのである。諸君は何故求めて来らる  
るかというに「精神が充実しない、空虚で力弱い」と、即  
ち来らるる目的はむしろ  
現世において充実したい、力ある生活をしたたいにある。し  
かるにその現世はかく何処までも顛倒といふのであるから  
それでは全く意味をなさぬことになつてしまふ。現に以前  
であるが或る青年雑誌を書いて居らるる人、私の話を聞いて  
『我々は意義ある生活を欲するのである。しかるに近角  
のは、現在に夢である、意味がないと言ふのであるから、  
それなら聞く必要がない』というて、聞くことをやめてし  
まわれた方があつたのであつた。しかしここはどうあつて  
も『大經』にもある如く

一切の法は猶し夢と幻と響との如しと覺了して、諸  
の妙願を満足して、必ず是の如きの刹を成ぜん。  
法は電と影との如しと知りて、菩薩の道を究竟し、諸

いよ／＼自分は涅槃に入るのである』と、かくお説きにな  
つたのが『涅槃經』の説法である。併し『諸行は無常なり』  
でかく此世はあてにならぬのであるが、そのあてにならぬ  
が何うなるか。その  
あとの処が肝腎である。今日の信者の人は、あてにならぬ  
と自ら自覚したよりも、むしろ他より言い聞かされて、言  
葉だけ覚えて  
その当てにならぬがどう救われるか分つて居らぬし、又青  
年は当てにならぬと面白くない故、  
當てになるようにすることに骨折つて居るのが。今日の信  
仰問題となつて居るのである。

故に先の苦空無常無我にしても、本當にそれが悟れてい  
うのなら悟道の言葉であるけれども、今日のは、  
苦空無常無我だと泣いて居ることになつて居る。即ち世間  
で言う処の罪惡觀、無常觀——この世は無常である、罪惡  
であると、泣き悲しむ意味の苦空無常無我であるならば、  
それだと常樂我淨の、人生は樂しき所と當てにする方と同  
じことになつて来る。今我々が仕合せだ／＼と幸福を喜ぶ  
のと、難儀な人が困つた／＼と泣き悲しむのと、  
心持ちは一つこと。即ち當てにしているから、泣き悲しま  
ねばならぬことになるのである。それを今日の信者の人が  
少し事あると『無常じゃ／＼、當てにならぬ／＼』それで

の功德の本を具して、受決して當に作仏すべし。  
諸法の性は一切空無我なりと通達して、専ら淨仏土を  
求めて、必ず是の如きの刹を成ぜん。

一切の法は斯く飽くまでも夢である、幻である、苦空無常  
無我である。これを常樂我淨と思つて居るのが凡夫の四顛  
倒であるという、ここが  
心を潜めて聞かんならぬ処である。

又老人の方になると、かく言えはすぐに『そうじゃ、そ  
の通り』と言われるのであるけれども、それがまた本當で  
ない。一切の法は夢・幻はあきらかに眼前の事実として存  
するのであるから、それをそういう風に氣樂に言い過ぎし  
ているのが、即ち顛倒の様であるという、そこに氣をつけ  
て聞いて貰わねばならぬのである。

## 三 八顛倒

そもそもこは  
積尊入涅槃の時は何うあるかというに、阿難が仏に申し  
て『如来、滅を示し給うこと何ぞ速かなる。願くばなお世  
に住して化を垂れ給え』こういう意味でお願いした時、  
『汝はしか言うけれども

諸行は無常なり、これ生滅の法なり。

此世は當てにならぬとかねていつて居るではないか。今

頂いた積りで居るけれども、ナニ実は泣いて居るのであ  
る。故にしばらくすると忽ちあと返りして、又もとの人生  
の當てになる方を追うと、こういふことになつて居るは、  
つまり一つ道を行き返り／＼して居るに過ぎぬのである。  
言い換えると私共

常住を樂しむも本當で無いし、無常を樂しむも本當でない  
故に『涅槃經』には、今の常樂我淨の上に苦空無常無我  
まで入れて

八顛倒として示されてあるのである。

## 四 善惡共に顛倒の妄見

こはいつても云う話であるけれども、私の懇意なある慈善  
病院を経営しておいでになるお方が

「病人を直してやつて、『先生のお蔭で』と礼言われる  
と、仏のおかげだと有難く思うけれど、直してやつてあ  
とで遇つても挨拶もせられぬと、あなたが礼言うて欲し  
いと思つてはなけれども、挨拶もせぬとはひどい奴だと  
いう心が起つてイヤになる」

と、いふことを言われたことがあつた。その方の考えでは  
人に礼言われぬと不足が出ると思つていらるのであるけ  
れども、その反面は、言われた時に仏のおかげだと言いつ  
つも、矢張り言われて喜ぶ故、言われぬと腹が立つ。する

と『言われぬと腹が立つ方も善く無いけれど、言われて喜ぶ方も考えなくてはならぬでないか』と申したことがあつた。

我々言われて喜ぶ故、言われぬと不足が出る、つまり同じことである。この世の仕合せを喜ぶも迷いなれば、子供が亡くなつてあてにならぬと悲しむも迷いである。『イヤ不足という方は善くあるまいけれども、喜ぶ方はよかるうでないか』と。ナニ喜ぶ方は出来るけれども、不足という方は出来ぬという我々でもないのである。

これは何か。人生は善かるうが悪しかるうが、喜ぼうが悲しもうが、皆顛倒であることを言ひ度いのである。

処が中には『子供が親に先立つて逆ことであります。これがこの世の顛倒の有様であります』とように言う人がある。私この間或るお方にお話した。非常に人生に成功せられた人で、子供の方もみな立派になつて居られる。家庭は円満で申分がない。自ら称して『これで私死んでも充分な筈であるけれども、何うも心淋しくて困る』と。子や孫や十何人を周囲に置いて八十歳という年をして『死んでよいのでありますけれども、どうも』と言つていられる。私『それは御もつともである。私より言うともむしろ反対である。貴方が充分で不足

のないにつけ、益々もつて死にたくないと思つてしよう。境遇がよきにつけいよくもつてこの世が名残り惜しいでしよう』と申上げたことである。

又反対に『この世が面白く無いから死んでしまいたい』これは悟りか。矢張り顛倒である。即ち善きにつけ、悪きにつけ、いずれも顛倒の妄見となつて来るのである。

### 五 一足飛びに飛び越える悪癖

とところでこのことを説くが、仏教なのである。どうも近頃私の言い方が際立て過ぎるのであるけれど、どうも世人が宗教といふと何の宗教も同じことと思つて居るのであるけれども、これを説くが仏教なのである。この世は夢、幻、偽り顛倒、これをいうのは仏教の外にない。ところが、ここまではまだ分り易いのであるけれども、このあとがむつかしい。この夢、幻、顛倒、当てにならぬを救うて頂くところが難しいのである。そこを一つうまく言わなくてはならぬ。処がここが手易く頂けるのなら事無いのであるけれども『淨信得難く、極果証し難し』……ここがなか／＼手易くいける処ではないのである。どうも近頃変な話方になるのであるけれども、大分此頃

は今までの説教聞いておいでる人が聞きに来て下さる。聞いてる人が聞きに来て下さるは、何処か頂き難い処があるからであるから、それ等の方々にはここかなめの処を申さなくてはならぬ。そこで先ず上来申しのべる如く、この世のことは何事も当てにならぬ、皆夢幻である。そこは御一人々々によりて色々あらんも、いよ／＼当てにならぬとなると、もうしようがないという外無くなつて来る。ところが、今まで聞き慣れの方は、ここでその当てにならぬから仏の御慈悲であると、ポイト一足飛びに飛び越えてしまふ癖がある。『この世はあてにならぬ、故にお慈悲の外はない、仏の外はない』と自分の方から飛んでしまふ癖がある。処がうまく飛べるなら結構であるけれども、小野の道風の蛙でなければ、なか／＼そこがうまく飛びつて居ぬのである。成る程『しようがないから南無阿弥陀仏々々』と、一時は心がらくになることもある。これが矢張り相変らずもとの所が動けて居やせぬのである。ここが本心に皆様の心に安心しにくくなつて居る処だから、茲をよく聞かな、殊に仏教の中でも自余の自力修行ならばそういうことであることもある。この世が当てにならぬから『サア何かしつかりしたものがなくて』と、例えば浄土宗なら念仏称えることもある。けれども本当の我々

の心底を言うと、そういうように一時的には救われた気持ちでらくになることはあるもそれが本当にいかぬから皆困つて居るのである。故にここは根本的によく聞いて貰わねばならぬ。全体今まで信仰の聞き方が雑である。早い話が皆様が『他力の話は簡単である。誰が聞いても能く分る。うまく聞きとつて信仰を得ることは難しいけれども、話だけは能く分る』と思つて居る人がある。これが非常な間違ひである。そんなやさしく分ることならば、何も親鸞聖人が愚禿の親鸞、慶はしき哉や。西蕃月支の聖典、東夏日域の師釈に、遇い難くして今遇うことを得たり。聞き難くしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して如来の恩徳の深きことを知んぬ。斯を以て聞く所を慶び獲る所を嘆ずるなり。(教行信証、総序文)と善ばれるわけではないか。『頂くは難しいけれども聞く段は出来る』ほどならば、聖人が仰言る程でなくなつてしまふのである。それをみんなが『他力は分つて居る。しよりの無い者を助けようというお慈悲である。それは分つて居るも、本當に獲るのが難しい』などと。それは肝腎のお慈悲の有難い、聞くべき所を聞かぬからそういうことになる。しからは、それ程喧しく言う

仏とは如何、本願とは如何。ここが肝腎の点である。

## 六 お慈悲とは如何

それは色々ということが出来るのであるも、先ず私の言  
いよいよに申すことにする。今申す如く、人生の快樂  
をたのしみ、不幸を歎いて御同ようであるが、いよいよ  
よと行き詰まればみんな致し方なく苦しんで居るのであ  
る。そこで極めて分り易く言うと、その如く一人一人が行  
き詰り、行きつ戻りつして見ようなく苦しむ御同ようの心  
を、一人々々に察して『それが如何にも悩しかろう、心配  
であろう』と、その皆さんの苦しむ心、心配、苦勞、悲し  
み——そのころを  
俗な言葉でいうと捨てずに、そのして見ようなき心を推量  
し、察し、その者に何処までも遣る瀬なく同情して下さる  
大慈大悲の廣大の御まことが、  
仏のお慈悲ということなのである。

処でこれが皆さんに届き難い所である。かく言うと皆さ  
んが『イヤ仏は有難い。けれども人はいかぬ』と、すぐこ  
れになりて困るのである。それだとその仏は、自分の氣に  
向く人。併し他は氣に入らぬ人となりて、そう言う仏なら  
顛倒妄念の仏になる。全体善い者はよけれども、悪い者は  
氣に入らぬと、この

とか、そういうことに取り易い。それよりかまた  
この世の實際生活を、仏の御恩のように思うて居る人が多  
いのである。殊に修養的の人は、自分が綺麗な心になり、  
他の悪を憎まぬように、  
仏を理想として、その方向に修養を進めようと思うて居る  
人が多いのである。私なども初めはこれであつたのであ  
る。『自分が人に不足言わず、仏を信する者が人を悪しく  
せぬように』と、それ故  
真俗二諦にしても、俗諦は王法仁義の道を守り、成るべく  
人に善くするようにと、信者の人がみなこれ言うて居る。  
即ち信者が俗諦をいうのと、青年が修養をいうのと同じ考  
えである。この考えでお慈悲を言うて居る限り  
他力の味は永久に分かる期はないのである。

## 八 私の氣のつき出したのは

処が常に言う如く私の氣のつき出したのは、その言うて  
る修養が本當に出来てないという、そこで  
私は氣がついて来たのである。私だとして初めから人を不足  
に思うたのではなかつた。むしろ宗教のため、人の為には  
身を捨て、いやしくも善と信することのためには、生命  
を投げ出して惜しくない。しかうしてそう思うて居る間は、  
自分ながら『熱心家じゃ、精神家じゃ、宗教のためには人

善し悪しの心で人に向つて居るが御同ようの心なのであ  
る。故に善いと思うのもいかぬし、悪いと思うのもいか  
ぬ。いつまでもこの心で人に向つて居るから、いつ迄も  
人生に善し悪しが止まぬとなつて居る御同ようの心であ  
る。故にそのいつまでもやまぬを遣る瀬なく思召す仏は、  
善かろうが悪しかろうが  
そのやまぬのを哀んで下さる御真実なのである。ここは肝  
腎の処ですが、分つたでしょうか。分つた積りで聞かれる  
のと、分らぬ積りで聞かれるのと、むしろ  
分つたと思われ方は用心せられなければならぬ。

## 七 私の経験

そこです  
私の入信の経験から申上げることにする。矢張り有体の処  
私なども他力の有難さは初めから分らなかつたのである。  
ここは他力の有難さが、初めから分るといふ人があれば、  
いふ人のが怪しい。他力の仏はなか／＼初めから分るもの  
ではないのである。故に青年で他力を言う人は、必ず何か  
に事寄せて言うて居る。或は宇宙の本体とか、或はこの人  
生の恵みであるなどと、種々様々の事柄から仏を作り出さ  
うとして居るのが、道理、理屈から行こうとして居る人の  
方向である。故に青年の人は、本体だとか、宇宙の生命だ

がやらぬか、自分が捨てて置くものか』と。これで長い  
こと、自分の学問を捨て、利益を捨ててやつて居つたので  
ある。してそうやつてる中に、段々自分の心を省みてみる  
と、たしかに自分は人より善くして居るという考えがあ  
る。故に『人に褒められたい』、『善く言われたい』この  
考えがある。それも自分の思うようやれて居る間は、またよ  
かつたのであるけれども、思うよう行かぬとなり出すと  
『人は勝手なことみなしている』と、そろ／＼人のことが  
不足になつて来たのである。『自分がこれ程やつて居るの  
に人が一向認めてくれぬ、察してくれぬ』と、これを考え  
るようになりて初めて

私の悪しきが見えて来たのである。今迄のが本當の犠牲的  
献身的であるならば、人が認めてくれぬかて不足の出で来  
ようはずがない。それを人が認めてくれぬと不足の出で来  
るは『成る程これは今迄善くした／＼』と、思つて居つたのが  
本當に善くは出来ていなかつたのであつた。人に誇りたい  
ため、自分が勝手な真似して、人よりも自分は善くして居  
るといふ氣を起して居つた、皆名利心の所以であつた』と  
これで今迄のがみな碎けて来たのである。ここ辛い所であ  
る。自分の本尊と頼んで居つた的が碎けてしまつたのだか  
ら実に辛い。

するとここで今迄の仏も碎けてしまつたのである。自分

が善くすると理想で作つて置いた仏であるから、自分が立たなくなると、何もかもみな一辺に砕けて来る。第一、俺は善くすると理想で作つて置いた仏であるから、自分が立たなくなると何も彼も一辺に砕けて来る。第一、俺は善くするの考えがあつたのがいかにぬとなるのだから、私のしたこと残らずがみな悪いことになつてしまい、ここ実に辛い所である。私の善はこれで駄目になつてしまつたのである。今まで人のため、宗教のためとしたこと、皆俺はこれ程よくするその名利心のためであつた。とこれで段々顛倒の善であつたことが明かになつて来たのである。

### 九 残るは妄念妄執ばかり

するとここでは信者の方は『それは我々のすることは、皆嘘であることは、そんなに念入れて言わぬかて分つているではないか』と思わるかも知れぬ。そんな軽いことでここが通ればよいのであるけれども、そんなことでは通れぬのである。第一皆様が自分のしたことが嘘であつたとなつて、嘘でもよいで安心出来ますか。もうここになると、再び陣立を建て直そうにも、もういかにぬのである。ここまで来ると今まで思うて居つた修養誠意、心に描いて居つた仏、宇宙の本体、みんな砕けて来る。故に

か』そんなことで行けるくらいなら誰も苦しみはせぬのである。ここで皆様が他力々々と言うて居られるのが皆自力になつてある。即ち、しかたなしの念仏、突きつけの信念、すがりつきの帰命、姿は色々であるけれども、結局安心は出来ていぬのでめる。

### 一〇 善し悪し思う自分の心

そこで、ここは私の心にあつた順序で言う。話が混雑して充分申されなかつたのであるけれども、こういうことだけは御諒解下さつたらうと思う。それはすくなくとも

『我々

人相手ではいかぬ。我々人を相手に善いとか悪いとか言うてるのであるも、人相手に善し悪し言うてる間はいかぬ故にここはそういう風に

人に善し悪し思う自分の心を解決しなくてはいかぬ』と。

ここは『誰しも初めは人相手に問題起しているのであるがこれは待て、人相手に善し悪し言うてる限りいつまでも切りがつかぬ。故にここは人が如何にあるうが、

此方が人を悪く思う心さえなくなつたらよかるう』と。即ち、ここで初めて自分の問題となつて来るのである。

『歎異抄』によしあしをあの如く言うてあるのは、これが

我々の苦の本だからなのである。そこでその善し悪しが思

唯心の弥陀、己身の浄土、心で作つた仏身観なら必ず破壊する時がある。しかして残るは唯妄念妄執の思い計りとなつて来るのである。処がここまで来ると皆様は『だから仏』と直ぐこれを持ち出されるのであるけれども、ここになると

仏を持ち出して問題が消えやせぬ。それは苦しいから仏前に行き念仏称えるという事はあろう。あつても相かわらずの心であるから何にもならぬのである。ここになると最早仏が有難いも何もなくなつてしまい、若し修養的の念

念仏も止つてしまふ。而して遺るものは唯自分の浅間しいばかり、隔て心ばかり。悪しきばかり、而もその悪しさが世間の善し悪しの悪しきなら、悪しの半面に善いがあるからまだよいのであるけれども、ここになると全部がみな悪しいのである。善いことせんとすれば俺がするで罪、悪しくていかぬと思えば矢張り俺が罪、みんなつみななのである。ここになりて

皆様どうなされますか。『だから仏だ』と言つた処が、そんなこと云うたつて何もならぬ。まるで取り着く島もないという有様。もしここで取り着く島があれば自力でやつて行つてよいのである。ここで皆様が『こう考えて行つたらよかるうか、こう修養して行つたら行けよう

う如くやまるか、止まらぬ。そこは我々自分の思想上に超絶の考えおこすというも、成る程そうするとよいとまでは分かるも、それが実際にはいかぬ。私はこれを隔て心と申しているのである。それが如何にすれば止まるか、どうしても止まらぬ。止まらぬのは五分々々の人間の寄合いだからなのである。即ち自分があの人悪いと思うと、向うもまたそれになりて、どうしても取れぬ。ここ相對界の有様なのである。

### 一一 最後に望む所は唯一つ

そこで私思うたには『自分はかく何うしても疑い隔ての取れぬ奴、故にいかぬが、哀れ願わくば私はこういう性の奴、こう云う何処までも疑い隔ての止まぬ性……』とそれは私の性分故誰に向つてもこの性を出す。——それは私の始め苦んだのは宗教界のことを刷新したいと、それでやり出したのであるが、段々誰彼に隔てがあるとすると、しまいに關係のあるなしにかかわらぬ、どんな人にも、——向うが虚心担懷で来らるる人にも、こちらから疑い隔てて、終に如何な虚心担懷な人をも隔て疑わせてしまふ自分である。故に自分のような者は捨てられて、もうとても駄目となつたのである。すると

最後に私の望む処は唯一つ、『哀れ世の中に誰か一人、かく飽くまで隔て深きが私の性と、そこを理解しなくなる者はあるまいか。かく何処までもしづと私が私の性と、そこを理解しなくなる者はあるまいか。かく何処までもしづと私が私の性と、そこを理解してぐるる友人があつて、こちらが如何に隔てようが、我慢張ろうが、それは君の性じや、分つてゐる。それは君の性質と分つてゐる上は、如何に君の方からは隔てようが、僕の方からは隔てぬと、こちらが我慢張れば、我慢張るほど、向うからは益々我慢張らずこちらが疑えば疑う程、弥々同情を以て見てくれる、そういう理解者があつたらよからう』と、  
ここが甚だ分り難い所なのである。

### 一二 人を呆れさす私

ここ大抵の方にこうとられて困るのである。それは『世の中の者はみないかぬが、誰か本当に見てくる者はあるまいか』と、それなら大いにいかぬのである。それは隔ては相手の如何にあるのでない。私の性にあるのである。ここは能く聞き分けて貰わなくては。よしここに如何程よき人があつても、私の性が隔ての性故、これでやるからみな呆れさせてしまうのである。これは今から十四五年も前であるが、或文学趣味に長けた御婦人、文学に耽溺して

つて行つて『彼奴前の世に敵んだ奴だな』と、これが三界流転ということなのである。故にこの善し悪しの心は何処まで行つてもやまぬ。止まればよろしきも止まぬから困るのである。止まらぬは世間がみな流転同士の寄合いであるからである。

### 一三 融けてしまえば問題は消滅なり

そこでかく如何な善人も呆れ果て、虚心担懐の人も呆れさすとすれば、それ程周囲に悪感化を及ぼす自分である。ところでここに一人の人ありて『宜しい、それは君の性じや、その性を同情した上はどんなことありても見捨てぬぞ』。ところが此方はその性故なか／＼ハイと言わない。『なんだ君子然として来やがつて』と、此方は益々その性で向つて行く。向えば向う程いよ／＼優しく向われる。『変な奴だ』と益々我慢で向つて居る間は、即ち私の我慢で向うの無我人を仆して居るのである。ところがここはその先方の真実が勝つか、私の我慢が勝つか。此方は如何にやるも向うは益々隔てず疑わず『その隔てる性が哀れ』と、何処までも優しく向われる、向うが絶対無我の人ならば如何な我慢の私も、その親切の前には頭が下ろすと、私の友人が欲しくてならなかつたのである。これは私の思想の運びを申したのである。分りますでしようか。

酔つたような有様になり、自ら堪えられずして、求めて来られたが、その方が信仰に入られた時の歌に

慕いよる蝶をもたおす毒草に

なおさし添うか 天つ日の影

これはよい歌である。慕い寄る蝶をも仆す、これである。我々は疑い我慢が性分故、如何なる同情で来る人も、この性分を出されると、驚き逃げてしまうのである。故に私この性が自分ではとても駄目じやとなつてしまつたのである。故に

茲へ気をつけて来ねばいかぬ。我々は人がいかぬ／＼と、第一いかぬ／＼といつまでも言うてる

その性がおかしいでないかと申すのである。これは激しいけれども、ここになつて来なくては自分の問題とならぬ。我々自分の問題は如何に苦しかろうが、人に善し悪しの考えがある限り

たとえ境遇を代えようが、友人を代えようが、周囲を代えようが、何処まで行つても同じなのである。即ちこの考えで何処までも迷つて果てしのないのを

流転輪廻と言ふ。私共一寸電車に乗る、人が横着な態度した、イヤな奴である、一寸人が退いてくれた、あの人はい人であると、これが何処までも附いて廻り、日夜善し悪しに五十年、終にこの世だけで足らずして、次の生まで持

も一度言ふと、我々世間が冷たい／＼と言うて居るのは冷たい自分が氷の性なのである。氷の冷たい手で人を攫むから、人も冷たくされてしまうのである。氷なれば寄りつく程の者を冷やさぬということはない。

そこへ

日光来りて『宜しい、どんな氷があつてもみんな引き受け、如何程冷たかろうが、如何程氷があるうが、

氷のために日光の冷えたためしはない。あるだけみな融かすが日光の働きた』と、氷の根底まで融かされてしまえば日光の前には融けてしまつたも、他の物の前には残つて居るといふことはない。一度日光に融かされてしまえば

問題はそれで済んでしまうのである。私が人に隔て、争い何処までも五分々々で取り合つてゆくこの性分、これを何処までも温めてくれる友人さえあれば、如何な私の性分も終には融けてしまつて腹がふくれるだろうと、私その友人を捜したのである。而してその時には

私もうそれが宗教であるうとは思わぬ。誰か人間に無い／＼と求めたのである。

### 一四 開法上の最悪癖

そこで私皆さんが  
お聞き下さる上の一番悪い所を一言する。皆さんが怒らず



に聞いて頂きたい。この会館が出来て多くの人がお集り下さるようになったのであるが、しかしもとは一人々々聞きに来て下されたものである。この会館は西洋館であるも、併しこういう建物が出来て、集りて聞く処という感じを与えたので、若しや皆さんの中に、

寺院へ行く気で来て居られる方はあらせぬかと申すのである。むしろ腐つた学舎で一人々々聞いて頂いた時分の方が本当に聞いて貰われた。形は西洋館であるも、一般合いに聞きに行く。寺院へ行く気で来て下される傾向があつては甚だ遺憾なことに思うのである。

ひどいようであるけれども、私が苦んだ時はどんな心持であつたかというに『仏のことはもう分つている。十悪五逆の悪人を救う、あれは一般合ひのことである。こんな者はもう到底駄目である。人がもう呆れてしまつてゐるのである。宗教はあれは皆合ひに聞くとこで、俺のはもう宗教ではいかぬ』と、こはむしろ

信仰はこの方が本当なのである。十悪五逆といわれて初めから頭下げ『ハイ、サヨーカー』それでは一般的になり、頭に込みこみようがないのである。故に私『もうこの悪い自分の性である。如何な人にも呆れられ、俺のようなものは

もう駄目』となつた時には、もう私は如来様、仏様とは思

わなかつた。——茲は

如来様、仏様で無くても構わぬのである。むしろそうなる

と一般的になりてかえつて分り難いのである。故に私のはその時はもう

親友、同情者、眞実者、誰でもかまわぬ、この自分の隔て深きを見てくれて、『あの性が不慈故、如何程へだても悪しくは思わぬ、何処までも見てやるぞ』こう云うてくれる眞実者という者が欲しくて／＼ならなかつたのである。

今日は大分遠慮なく申す故、御許しを願ひたいのである。而して終に時至りて、その『隔て／＼／＼、その隔てるが汝の性』と、その性を何処までも見て下さる眞実者が即ち仏であつたと、私ここで初めて安心させて貰つたのである。

### 一五 両面の間違い

処でこれを軽いことに聞いて頂いてはならぬ。この私が隔ての性を何処までも可愛相と見て下されるという、ここ一つを諭えを以て聞いて頂こうと思う。つねに云う監獄の囚人の譬である。

囚人が自分のような犯罪者、必ず人が悪しく思うと疑い深くなつてゐる。処がそれに同情する同情者の方が『自分

疑い隔てをとられてその御眞実の頂けたのが、仏のまこと

の届いて下された処なのである。

処がこれは、一言聞いて有難いぐらゐの軽きことならず

こちらは何時までも／＼隔てにへだてて『もうこれ程やつたら相手をたおしたろう、もう先方も大抵愛想つかしたろう』斯う思う処に、先方はなか／＼『それは汝の性じやもの、何程なりとも隔てて居れ／＼、此方はそこを見ようというのだもの』と「なおさし添うか天つ日の影」先方が何

処までも／＼善くせらるるのに、

此方は実に思い懸けも無い。こちらから善くしたなら向うもよくせらるるのが当然であるに、此方はこれほど悪しく

する。それを何処までも遣る瀬なくいうて下さる御眞実とは、実に思いがけもない慈悲である。仏智不思議、本願不思議は即ちここの味いなのである。

大正七年十月、求道誌所載。

人も見ぬよしなき山の末だにも

すむらん月の影をこそ思へ

西行法師

# 仏典と私との親しみ (二)

福 島 政 雄

## 化 城 の 喩

そういうことを法華経から教えられてまいって居ります  
が、この頃、大阪の四天王寺から出しておられます。「四  
天王寺」と云う雑誌に、<sup>昨年</sup>の九月から、法華経物語とい  
う題で、この経をすこし和けて書いて、それに私の感想も  
ありますけれども、聖徳太子の御註釈によりまして、その  
ところ／＼の味いというものを書き添えたりして見まし  
て、毎号続いて出して頂いて居るのでありますが、この頃  
化城<sup>けいじょう</sup>喩品のところで非常に感じて居ります。

この化城喩品と申しますのは、五百由旬という非常に遠  
い道、その道も、険しい、悪い道を、沢山の人々が、向う  
の宝の世界を求めて歩いて行く。険しい道でありますから  
その途中ですつかり閉口して、もう止めたくなくて、あと  
飯りしようかと云うようになつて居る時に、それを導いて  
いつている方が、三百由旬というところに一つの立派な城  
をこしらえて見せる。あそこまで行くと、あの城の中で十  
分休息が出来るから、一つ行こうじやないかというよう

ら、西南の方から、そういうような方角から十六人集つて  
見えるということになつて居りますが、その第十六番目が  
お釈迦様なのであります。そのお釈迦様は他の十五人の王  
子、御兄弟と一緒に、お父様が長い間三昧に入つて、黙つ  
てじつと心をしずめておいでになる間に、他のお兄弟達と  
沢山の衆生をお教化なされた。そして過去の衆生のみなら  
ず、現在の衆生も、そして未来の衆生も、その十六の王子  
によつて仏縁が結ばれている。そして十六人の御子さん方が  
いよ／＼お父さんがお悟りをおひらきになつたという時に  
そこに来て、それから色々な方面から——梵天王、精神的  
世界の王様という様な方——が集つて来る。

そして梵天王達も、十六の王子達も、皆一緒になつて、  
どうぞ、私共のために御法をお説き下さいますようにと、  
お願いすると、それで大通智勝如来がお説きになる。この  
初めての御説法が、この四聖諦、十二因縁、八正道と云う  
ような御説法でありまして、これは所謂小乗の悟りという  
のであります。

## 四聖諦、十二因縁、八正道

四聖諦というのはお聞きになつて居るでありましよう、  
苦集滅道。この世は苦しみである。その苦しみは我々の煩  
悩からおこる。どうしてもその煩惱を滅せなければなら

ことで勵まして、先ずその城で休息させ、皆がすつかり元  
氣恢復したところで、すつかりその城を消してしまつて、  
これからいよ／＼宝のある所へ行くのだと云つて導かれる  
あの化城喩品というあそこでありまして。

## 遠い因縁

あの中に、昔々からの因縁というものが出ておられます。  
化城が出て来る前、昔々大昔、大通智勝如来という方がお  
出ましになつて、一心に修行して仏のさとりを求められま  
したが、仲々そのおさとりがひらけなかつた。そうすると  
精神界の王様である大梵天王なんか、チャンと菩提樹の  
下に坐をもうけて、そこでお悟りをひらかれますようにと  
云うようなことで待つて居る。仲々お悟りがひらけない、  
大分長い年月が経ちましてから、初めてお悟りがひらけま  
す。ところがこの大通智勝如来に十六人の男の御子様があ  
りまして、その御子さんが、お父さんが出家修行なされる  
ということを知り、自分等も出家修行をする。

その十六人は、東の方から来、東南の方から、南の方か  
ぬ。その煩惱を滅するには、正しい道に依らねばならぬ、  
それが四聖諦であります。

それから十二因縁というのには、お聞きになつて居る通り  
我々の生活の根本は、無明、真つ闇い中から始つて居る。  
そしてその真つ闇い中から、我々の業を積んで居る。そこ  
に根本の識<sup>しち</sup>というものがあつて、その識から我々の行があ  
らわれて来る。そしてそれが精神的、物質的存在として、  
名色、と云いまして、精神と物質、精神と肉体とが一つに  
つながり合つたものとしてそこに現れて居る。それには、  
眼耳鼻舌身意と云つて六つの入口がある。眼や耳や鼻や舌  
や、身体全体、それから心と、そういう入口から、色々な  
ものが入つて来る。そうするとそれに触れる。身をもつて  
触れる。眼をもつて、耳をもつて、手をもつてふれる。触  
れるとそこに快<sup>たし</sup>いものに対しては執着<sup>しやくちやく</sup>がおこつて来る。  
執着がおこつて愛する<sup>あいする</sup>という心持となり、そういうことが  
我々の生きて居ることになり、生きて居るけれどもいづれ  
老いて行き、或は病氣になつて死んで行く。そういう我々の  
生活状態というものは、無明という、真つ闇いところか  
ら出立して、種々のところを通つて、病氣して死んで行く  
となる。それを根本の無明の闇を滅すれば次のものが滅し  
て来る、これが十二因縁の悟りでありまして。

もう一つ、八正道というのには、前の四聖諦、苦集滅道の

道、まことの道、正しい道というものはどういふものかというのと、言葉を正しくするとか、自分の行いを正しくするとか、自分の生活を正しくするとか、自分の心を正しくするとか、自分の心を正しくするとか、八つであります。そういうすべてを正しくしなければならぬという、これが釈尊が悟りをおひらきになりましたところの最初なのでありますが、それを大通智勝如来は、十六人の御子様方を始め、そこに集つて来た大梵天王という様な連中にお説きになる。

そこで私、考えさせられるのであります。法華経は大乗の教といわれている。然し法華経の非常に尊いところは、それは大乘の教であるが、それは小乗を排斥したところの大乗といふことじやない、小乗を包み容れている大乘である。四聖諦、十二因縁、八正道といふようなものは、小乗の悟りだとよく云われるのであります。法華経にはそういう小乗の悟りを包み容れて、大乘の悟りの至極である妙法蓮華経といふものを最後にとかれてある。大通智勝如来がそうなのであります。

その小乗の悟りを通して、一応落着けて、そのもう一つ奥の大乘の悟りといふところまで引張つて行く。そして小乗の悟りといふもので一応落着かせるといふところが、三百由旬のところの飯の城を造つて、そこで休息させる。然

天女が空中から花を降らす、その花が他の菩薩方のところではサラ／＼と落ちてくつきませんが、舍利弗の身について離れない。舍利弗は、この花はいけない、いけないと云つて払おうとする。つまり女の散らした花が自分にくつづくようでは自分の煩惱が駄目、そういうことであります。そこで天女が現れて来て、「何をあなたはしていますか。」「イヤ、女である貴女が散らした花がくつきついでどうもいけない。払つていますが、花がいけないのです」と舍利弗が云うと、「花がいけないのではありません。あなたの心がいけません。あなたの心にまだ女に対する執着があるのでしよう、だから女の散らした花がくつきつのでしよう」と天女が舍利弗をからかう。あんなと、いろいろあります。免に角、小乗仏教に對立する大乘仏教だといふところが維摩経にはある。そんなところをもう一つ踏み越えて法華経は、一乘法といふのであります。それは小乗大乘の對立をもう一つ踏み越えて一切を包容するところの教の世界である。そういうことを教えられたお経として本當に有難いのであります。

### 塵点久遠劫

親鸞聖人は教行信証にはあんなまり法華経を引用されてないやうであります。大經のお心持を讃歎された和讃に

しそこに何時までもとまつていたのでなくて、その飯にこしらえた城を消して、いよ／＼まことの宝の世界に進むとして所謂、妙法蓮華経の大乘の教がひらかれるといふこと、そのところが、この頃考えさせられているところでもあります。

### 小乗と大乘

前回に、釈尊のお悟りのことをすこしばかり申し上げましたのでありますが、つまり釈尊の最初のお悟りといふのは後に小乗といふようなことを云つておりますが、その小乗といふのは、必ずこれを採り入れて、包容してそして大乘の道がひらける。そのところに、何ともいえない包容力の大きな世界といふものがこの法華経にあるといふことを感ぜしめられるのであります。

ところが維摩経になりますとそうではありません、これも聖徳太子がお註釈して下さつた大事なお経でありますけれども、維摩経は何だか、小乗と大乘が對立しているところがあつたやうであります。

その小乗の代表者を舍利弗、これは釈尊の第一の御弟子さんであります。一番釈尊のことが解つていた舍利弗を、小乗の代表者のやうにして、舍利弗が散々にかからかわれる、

弥陀成仏のこのかたは今に十劫とききたれど  
塵点久遠劫よりも久しき仏と見えたまう

と、これが親鸞聖人も法華経を深く味つておいでになる証明になると思つてあります。塵点久遠劫といふのは、今申しました化城險品の大通智勝如来といふ仏様は、昔の昔の、そのまた昔にお出ましになつた。それを云つて見るならば、三千大千世界を墨にすつたと考えて見よ。その墨になつたこの墨を筆につけて、東の方千の国土を過ぎて一点を下す、また千の国土を過ぎて一点を下す。そういうやうにしてこの三千大千世界を墨にすつたものがすつかり無くなり、千の国土、千の国土を過ぎてズーとやつて行く。そしてまたその点をつけた間に沢山の国土があるはずだ。それをまた微塵に砕いたと考へて見よ。そしてその一つの塵を一劫、一劫といつても大分長い時間でありますが、その一つ塵を一劫と考へて見よ、非常に長い時間になるであろう。そういう長い時間よりも、もつと長い昔に、大通智勝如来はお出ましになつたのである。これが三千塵点の喩といふので有名になつていふのであります。そこを聖人は、弥陀成仏のこのかたは、今に十劫といふのであるけれども、実は、法華経に説いてある塵点久遠劫よりも、もすこし久しい仏と見え給う。つまり大通智勝如来が説いてある、久遠のいにしえからのみ仏様は、矢張り弥陀如来である。だか

ら私共には実に何とも云えない遠い／＼因縁というものがあつて、そこに私共が、ここに仏縁というものがひらける準備が出来て居つて、そして私共はこの世に生み出されて来ている。

### 因縁和合

それはまあそういう喩で法華経で説かれてありますが、私共は銘々に、自分が今こんな生命をこの世にうけて居りますが、非常に遠い因縁がある。その遠い因縁が生物学的に続いていることばかりでなしに、精神的にも遠い因縁がある。それは実にそうに相違ないということをお自身は段々にこう感じますのであります。非常に遠い因縁がある。たとえば、兄弟六人ありましたが、その兄弟というものとは一人々々精神的性格が違ひますのであります。同じ父母から生れたものでありますならば、同じものが生れそうでありますのに、そうでない。前回積尊の生涯で考えましたように、因縁の、因と縁とはつきり分けて考えねばならぬ。私共がこの世に生れて来る縁は父母であるけれども、因は、根本の原因である因は、自分というものの生命が出て来るまでの遠い／＼と／＼に続き続いて来ている。それは生物学的に遺伝細胞が／＼／＼につながつて来るといふことでは説明の出来ない、同じ父母から生れた

を縁となして、因縁和合してこの身あり」といふ。あれは非常に味いのある言葉でありまして、自分の業、自分の識、それがずーと続いて来ている。それが根本の因であつてそこに父母の精血・父親から精子、母親から卵子、それが縁となつて、その因縁が和合して、自分が生命をうけて生れて来るのであるといふ。善導大師のこのお言葉といふものは、所謂科学にも衝突しない、科学の言うところをもう一步深めて精神的に云つてある。私共の生れて来る根本というものを知らされる上に有難いお言葉であるといふことを有難く思つて居ります。それも親鸞聖人によつて知らせて頂いたことでもあります。それがまた法華経によつて裏づけられている。つまり、この自分の生物学的、また精神的過去において久遠なるものを感じる、今の私がであります。

### 梁塵秘抄

長者はわが子の愛しさに、瓔珞衣を脱ぎすてて、あやしき姿になりてこそ、漸く近づきたまいしか

窮子の譬ぞあわれなる、親を離れて五十年、萬の国に誘はれて、草の庵に留まれば

がら、兄と弟、姉と妹ではサツパリ違ふ。私の子供なんかもそうであります。八人生れまじつたけれども、一人々々違ふのであります。同じ父母が因でもあり、縁でもあるといふのであれば、同じものが生れなければならぬのに、矢張りそうではない。父母は飽くまで縁、たすけになつて、私共がこの世に生れて来る補助になつたので、この因は、私自身にかよう／＼の経路を過つて来たときと見てくるわけに行きませんけれど、今の私の感じから仏典を味わされて静かに考へて見ますと、遠い／＼昔に、精神的因といふものがつながらつて居る。肉体的にもつながらつて居る。それが父母といふものを縁として生れて来ている。

かういふことを、今のような大通智勝如来のこのお子さん達の非常に長い間の因縁、そこに一切衆生に縁が結ばれてあるといふことを読みますと、それは空想的な戯でもないことであるといふことでなくして、私なら私といふものが、この世に出て来る上の根本の、私自身では分らない遠い因と、そして縁といふものが、そう云うお話によつて私になんとか感ずるようになつて居る。そんなところが法華経といふものが私に与えられた非常に大事なことがあります。

そうでありますから、前から感じて居ります善導大師のお言葉であります。「自らの業識を因となし、父母の精血

### 葉草論品

我等は薄地の凡夫なり、善根勤むる道知らず、一味の雨に潤いて、などか仏にならざらん。

### 譬諭品

四大声聞こしらえて、三界火宅を教え出し、白牛の車をさし寄せて、直至道場定まりぬ。

幼き子どもはいとけなし、三つの車乞うなれば、長者は我が子の愛しさに、白牛の車を与うなる。

### 寿量品

沙羅林にたつ煙、上るを見しは空目なり、釈迦は常にままして、靈鷲山にて法ぞ説く。

### 不輕品

不輕大士のかまえには、逃るる人こそ無かりけれ、群る縁をも縁として、終には仏になしたまう。

不輕大士ぞあわれなる、我深敬汝等と唱えつゝ、打ち罵り悪しき人も皆、救いて羅漢となしければ。

仏性真如は月清し、煩惱雲とぞ隔てたる、仏性遙かにたためてぞ、礼拝久しく行いし。



# あとがき

年頭を謹んで賀し上げます。慈光に御寄稿下さいます先生方も御健かに春をおむかえになりまし。

歳旦をまずおとする念仏かなの池山先生の信味を年々あたらしく感佩して居ます。

年頭、近角先生の「是の心顛倒せず」の御講話を揚げて頂ました。どうか繰り返し御味読下さいます。そこに必ずや周到な大悲のみ心を御感得いただけると言います。先生の御話には水ももらさぬ、行きとどいた、万人がいやといわれぬものがあり、雨の日も、風の日も、雪の日も、雨の日も太陽が東天にのぼり夜の闇を破るに似て、時代をこえた真実を仰ぐ次第であります。

福島先生の御講話は、太子の法華経義疏を法隆寺に佐伯定胤老師からお稟けになり、その深い信味をお述べ下さいました。法華の一仏乗のおしえが、親鸞聖人において、誓願一仏乗と信証せられ、念仏の味いとなつております。法華経と言え、日蓮宗のみの經典かの如く一般に考えられて居りますが、そういうものでなく、念仏の上に真意が頂けますことをこの御講話で知らされます。

歳末以来、名古屋に沢山の学校がありますのに、学生の仏教寮のないことを残念に思い、又各地に学生仏教会も出来て居りますのに、名古屋にその動きも目立ちませぬ現状を思い、名大の上田先生や、信道念館の福田先生、衆善会の三上先生、等々としつづ談合して、そうしたものの萌芽を願つて居ります。名古屋の医大にも聞信会というものが戦前にはありまして、その歴史は古く、多田鼎先生を煩わして月々開かれて居り、また白井先生が御在職中には歎異鈔の輪読会もありました。学生期に正しい宗教を知ることの大切さは申すまでもないことでありませぬ。具体化される日を切望して居ります。

御案内毎月第一、二、三日曜午後一時半一道今例会。南区駈上町二丁目八十八市電新郊通り一丁目下車東入る。  
毎月廿四日午前、午後、昭和区小桜町、教西寺法話会市電御器所通り下車。

## 念仏者の人生論

西元 宗助 著

(内容) 一、み仏の国 二、凡人の救い 三、今日一日のいのち尊し 四、親と子と 五、宗教と私。

(著者紹介) 明治四二年鹿兒島市生れ。京都府立大学教授。定価、三三〇円。発行所 京都市下京区堀川通花屋町。百華苑。振替

京都二五七八八番。

## 持地菩薩の説話

華嚴経の円通章に持地菩薩の話が出ています。この方は広い土地を持つて小作人も沢山居りました。或年土地の凸凹や難路を修繕して苦労されましたが、その時「自分は天下中の道路を平坦にすることも難しいが、我が心の高低を平にすることは一層難儀である」と歎かれました。また或時、車牛が泥路にはまつて難儀しているのを見て「牛は仏教では善の象徴、菩薩はその後押しをしました。牛は難なくそこを通り抜けました。その後姿をしきりに菩薩は拜まれた。自分も後押しをして貰いながら、この牛の上に乗らずに過している。この牛はそれを教えてくれた」としみしみ述懐せられました。

定価	一部	二十五円(送共)
	半年	百五十円(送共)
	一年	三百円(送共)
編集・発行人	花田 正夫	
印刷	名古屋市中種区千種町馬走二八	
印	人 本田 政雄	
名古屋市南区駈上町二ノ八八		
發行所	慈光社	
振替口座	名古屋一〇四七〇番	